

「統合のための 良好な条件を 整えるのは 私たちの義務」

エヴァ・ヤイスリ氏 (PB Swiss Tools 社 CEO)、
アドミール・オパルジーヤ氏 (企業コンサルタント) との対話

エヴァ・ヤイスリさん、エメンタールの御社 PB Swiss Tools では、全世界に向けて高品質の工具を製造しており、社内の女性の割合は 30%。また、90 年代初頭、御社は 12 名のタミール人難民を受け入れ、現在ではもう、その子供たちが PB Swiss Tools で働いているとのこと。その経緯をお話しいただきませんか？

エヴァ・ヤイスリ 要するに、状況は今と似ています。90 年代初頭、多くの人がスリランカからスイスに移住しました。特にベルンはその数が多かったのです。エメンタールは、そのような難民を受け入れ、施設を利用させることには熱心ではありませんでした。当社は官庁と協力し、また他の企業に働きかけて解決の糸口を探りました。私たちは、職業訓練やさまざまな形の雇用を提案しました。従業員も一緒になって取り組んだのです。人々をサポートしながら、クラブ活動を説明しました。それはこの国ではクラブがネットワーク形成にとって重要だからです。それは誰にとっても共通の課題ですから、一緒に克服しようとしたのです。官庁、従業員、雇用者、諸団体、教員が頻繁に連絡を取り合いながら一致協力したのです。



エヴァ・ヤイスリとアドミール・オバルジーヤ、チューリッヒのハンドブロードブリュック橋にて



アドミール君、君は 1993 年、ボスニア難民としてスイスに来たのですね。チューリッヒ - ヴィーディコンの州立学校にいたとき、委員会は、君が引き続きスイスで教育を受けられるということ、ボスニアに戻らなくてもいいことを決定しています。1997 年のことです。それほどの支援経験は、君にとってどうでしたか？

アドミール・オバルジーヤ：エヴァ・ヤイスリさんのような多くの人と知り合う幸運に恵まれました。1997 年、ボスニア難民は故国に帰るように求められたのですが、スイスに生活の基盤を持っていなかった父はその時、戻って行きました。私は、ここに残るかどうかは私自身で決めなさいと両親に言われました。私はチューリッヒにいて、教育の真っ最中だった約 20 人のうちの一人でした。同じ教育をボスニアで受けることは、難しかったらうと思います。教育システムがまったく違いますから。私は 9 歳でスイスに来て、ここが生活の中心でした。友達もみんなここにいました。私たちが、この決議に触れたとき、学校や知り合いの中のかなり多くの人が、私たちを応援してくれました。新聞に記事が出て、瞬く間に一万もの署名が集まりました。私は、信じられないほどの支援を経験したのです。知らない人々までが、私たちの側に立って、教育を受ける権利を主張してくれました。

ヤイスリさん、あなたは、タミール人の従業員が非常に忠実で、利益をもたらしてくれると仰っていますね。あなたの側では、どんな努力が必要だったのですか？

ヤイスリ：統合の進み方は多種多様でした。言葉を統合の指標にするなら、じきに「ドイツ語ベルン方言」をすらすらと話すようになった人もいますし、そうでない人もいます。ただ、最初に話せるようになったのは子供をかかえた人たちだったでしょう。日常生活の面で子供たちに支えられていたわけです。当社は新しい従業員に、彼らが歓迎されていること、そしてここに基盤を築けることを伝えられたと思っています。当社は彼らに長期の展望を与えましたから。扉はいつも開かれているのだと彼らも理解してくれたはずです。当社は、研修や語学コースなど彼らを導くための施策を取り入れました。語学コースは今でも提供されています。ときどきは、発破をかけることもあります。彼らには、一つのコースに参加すればいいというわけではなく、いくつものコースに参加しなさいよ、と伝えています。私たちは一緒に目標を設定します。従業員たちが、最後にその目標に到達できる

エヴァ・ヤイスリ

*1958 年生まれ、世界に向けて高品質工具を製造するエメンタールの家族企業 PB Swiss Tools を 20 年にわたって経営。心理学とソーシャルケースワークを基礎研究として専攻した後、経営学 / 組織開発を追加修了して卒業。加えて国際マーケティングで MBA を取得。

アドミール・オバルジーヤ

*1983 年生まれ、1993 年にボスニア難民としてスイスに到着。チューリッヒ大で経済学を修得し、現在は企業コンサルティング企業で活躍。

ということは、当社の責任でもあるのです。十分な前提条件を作り出すことは私たちの義務であり、それなくして労働統合は機能しません。

社長としてのあなたは、難民雇用は企業の社会的責務だとして、スイスの雇用者にもっとそれに取り組むように働きかけていました。それには、どのような反応がありましたか？

ヤイスリ： 極めてさまざまです。強く支持する、高く評価するという声が届く一方で、残念ながら、非難めいたコメントも多く耳にします。もう当社の工具を購入しないと書いてきた方もいらっしゃいます。あるいは、国内の人たちに優先権があると主張した方々もいました。私が会員になっている Swissmem、つまりスイス機械・電気・金属産業連盟では、二国間協定の中でしだいに、国外で専門労働力の募集だけでなく、すでに国内にいて一緒に暮らしている人間に労働を提供することが優先的問題になっていると申し上げておきます。私は、この立場を説明するために多くの対話をしてきました。基本的に、私の呼びかけへの反響は非常に大きなものでした。このテーマは両極化しています：白か黒かどちらか一方だけが存在するという感じがしました。

「自分のことを他人が見るように見ることがよくあります。特に異国の環境にいるときには。私の例は、教育への投資が無駄にはならないということも示しています。私は今、いい仕事に就いて、自分のお金をスイスで使い、ここで税金を払っています」

アドミール・オバルジーヤ

アドミール君、君の両親がボスニアへ戻って行ったとき、君は養父母一家に入りましたね。その後、チューリッヒ大学で経済を学び卒業した。つまり、君は夢見たキャリアを手に入れたということだと思いますが、君はどのようにその成功に到達し、それにはどんな前提条件が必要だったのですか？

オバルジーヤ： 分岐点は、既に最初の最初にあったと思います。つまり、私は両親と一緒に、比較的豊かな自治体、ウィティコン / ヴァルデックに生まれました。私のクラスには 15 人の子供がいて、外国人は私だけでした。先生から、できるだけ一緒にやってみようと言われてました。ドイツ語の補習授業には行っていません。最初からほかのみんなと同じ扱いでしたから、その方法は受け入れやすかったです。両親は、「お前の教育が一番大事だ」と言いながら必要な支援をしてくれました。その他、先生もとても熱心にサポートしてくれました。先生は後にヴィーディコン校に手紙も書いてくれ、責任者に私のケースを説明してくれました。正直に言うと、私は自分が難民だという意識をほとんど感じませんでした。私の両親がボスニアに戻ったとき、ウィティコン / ヴァルデックで親

しかった家族が、私を受け入れると名乗り出てくれました。私は7年間、彼らのもとで暮らしました。彼らは私のことを、自分の息子のように扱ってくれました。私は、スイスの家族にどんなに感謝してもしきれません。彼らは私にとっての模範です。さっき話に出た黒白の像で言うのであれば、私はスイスの白い側面しか知らないのです。ヤイスリ：君には、期待をかなえる潜在力があったんだと思います。期待は、原動力になることもあるし、君の周囲の人たちは君を信じていた。それが、非常に大きな力になっているのです。オパルジーヤ：はい、それは重要なことです。つまり、自分の

「私たちが今、難民を雇用するための解決策を見つけることができなくても、それがどんな財政的、社会的結末になるかは、非常にはっきりとわかっています」
エヴァ・ヤイスリ

ことを他人が見るように見ることがよくあります。特に異国の環境にいるときには。私の例は、教育への投資が無駄にはならないということも示しています。私は今、いい仕事に就いて、自分のお金をスイスで使い、ここで税金を払っています。ヤイスリ：業績をあげたいと望む経営者としては、やはり会社の立地を考慮しなければなりません。ですから、立地に発生している問題に気を使います。私たちが今、難民を雇用するための解決策を見つけることができなくても、それが財政的、社会的にどんか結果をもたらすかは、はっきりとわかっています。だからこそ、難民の教育への投資と労働統合はいつだって無駄にはならない、私はそう信じています。

難民に対する運動は、社会を分裂させます。つまり、一方には「怒れる市民」が、他方にはボランティアで支援しようとする市民が発生します。また、ポピュリズムが、政治による問題否定への反応であることも明らかになってきています。スイスにある意見でどんな意見が真実を語っていると思われるか？

ヤイスリ：全体を見渡すと、非常に意見が対立しています。私には、22歳から31歳の子供が4人います。末の娘は、ジュネーブで大学に通っていて、数ヶ月前から難民を支援するための取組みをしています。特に語学の授業の提供や、大学の講義に出やすくするようにすることで。真ん中の娘は、ベルンの法学部を卒業し、Heks(スイスのプロテスタント教会系の支援団体)法律相談で難民庇護申請者のために働いています。私の友人の中には、難民保護の分野で活動している者もいて、彼女は受け入れと統合のための解決策に取り組んでいます。でも他方では、強い拒否反応を示す「怒れ

る市民」の存在も感じます。当社では、難民に対して実習と体験見習いの機会を提供しています。若者には事業所を見学させています。その案内には、私たちの実習生を受け入れています。それは、彼らが、難民とほぼ同い年であり、その方がうまくいくからです。実務的な解決策を求めて取り組んでいる人々も多く目にします。社会の中にはプラス思考で建設的な勢力が優勢だと思っています。**オバルジーヤ**：人々の中に不安を撒き散らすのは、それを鎮めるのよりも、いつも簡単です。ですから「怒れる市民」は、基本的に簡単に現れます。外国人住民が最も少ない場所、ドイツ東部、アペンツェル州、またはウリ州では、拒否が最も大きくなっています。しかし「貫徹イニシアティブ (Durchsetzungsinitiative)」に関する投票に、私に強い確信を覚えました。社会全体が山を動かしたと感じたのです。それまで政治的な意見を表明しなかった人間が、急に声を上げたのです。それは、重要なサインだったと思っています。

「貫徹イニシアティブ (Durchsetzungsinitiative)」に関する投票では、さまざまな市民社会グループが、スイス国民党主導の運動 (= 貫徹イニシアティブ) に反対するように動員をかけました。この政党から独立した政治的行動者の影響をどのように評価しますか？

ヤイスリ：活動や運動を通じて重要な働きをしたポジティブな勢力が多数あります。支援組織や NGO の分野でもそうです。しかし、それらの諸勢力が政治的意見を圧倒すると信じるのは、たぶん誤った推論でしょう。投票のときは、だれが意見を出し、だれが浮動票を取り込むかが、結果を分けました。そして最終的には、残念ながら結果は金銭の問題でもありました。**オバルジーヤ**：どれだけのお金を投票のために支出してよいかルールを決めるべきでしょうか？**ヤイスリ**：その判断に、私は適任ではありません。でも大量移民イニシアティブ (Masseneinwanderungsinitiative) のときの結果に関しては、怒り心頭です。というのは私たち雇用者は、無力をさらけ出してしまったからです。あそこまでいってはいけないはずだった。私たちは、自分たちの意見を完全に明白に説明し、事実レベルで感情性に対処しなければならなかったのに、そうはなりませんでした。私たちのデータと事実を使えば、若干のことは明らかにできたはずなのに、それができませんでした。でもそんなキャンペーンには、実際に実行したとしたら、当然ながらお金もかかったことでしょう。**オバルジーヤ**：私の目には、今の政治は市民個人々人ほど特定のテーマに近づいてはいないように見えます。ただ基本的に、そのこと自体は民主主義において、悪いことではありません。私の目から見ると、むしろプラスのように思えます。政治的活動の高まりが世論に反映し、その後で政治が反応するというのが民主政治の原則だからです。私のケースでは、当時がまさにその状態でした。

